

正智深谷高等学校特別コラム

Mind Charging

Since 2020

第296回

ファーブル

の名言

発行：入試広報室

発行日：令和4年2月28日

編集委員：入試広報室 鈴木



今回の言葉

It's to know to see.

見ることは知ることだ。

ジャン=アンリ・カジミール・ファーブルは、フランスの博物学者であり、また教科書作家、学校教師、詩人としても業績を遺した。昆虫の行動研究の先駆者であり、研究成果をまとめた『昆虫記』で有名である。同時に作曲活動をし、プロヴァンス語文芸復興の詩人としても知られる。

Column

今回の言葉は非常にシンプルではありますが“知る”ということの定義としてこれ以上のものはないと感じさせてくれる言葉だと思います。ファーブルは、昆虫の行動を研究することでその生体を発見する“行動研究”の第一人者であり、溢れる知識欲とエネルギーを燃やして積極的に研究を行っていたそうです。つまり、今回の言葉の通り『よく見ることで知識を広げていった』ということです。

彼が昆虫研究の第一人者になったことは純粋に立派なことですが、彼のようなスタイルの研究者がいなかった（少なかった）こともトップになれた理由のひとつであり、結果を出して認められるまでは周りから受け入れられないことや批判されることもきっと少なくなかったのではないかと感じました。“先駆者”と呼ばれる者の宿命ともいえるのですが、人は自分と違う考えに対して否定的に捉えてしまいがちですので、受け入れざるを得ないレベルまで行かないと“異端”扱いされることがほとんどです。ファーブルが残した名言のひとつに『学者というもの文句を言いたがるものだ。私はこの目で昆虫を見ている。反対する人は自分で観察してみればよい。きっと私と同じ結果が得られることだろう。』というものがあります。この言葉からも、やはり最初は否定されていたのだということが読み取れます。しかし、しっかりと言い切っているところから、自分の研究スタイルを貫くという“覚悟”や研究によって確認できた事実に対する“自信”があったことがわかります。

ことわざにもある『百聞は一見にしかず』を実践し、彼の研究の成果をまとめた“ファーブル昆虫記”は現代でも多くの方が手に取る有名なベストセラーです。このコラムの上部に記載していますが、作曲活動の方でも有名だそうで驚きました。きっと昆虫研究と同じように自分の目や耳でしっかりと感じて研究して作曲を行ったのだと思います。様々なジャンルで業績を遺したファーブルは本当に素晴らしく高い能力の持ち主だと思いますが、彼ほどの高い能力を持っていなくても可能だと思います。なぜなら能力差を埋めるだけの『情報量』は現代には溢れており、情報収集のためのツールであるスマホやPCがあるからです。現代ではその情報をどのように判断して扱うか（受け入れる）が課題だと思います。判断力を磨きつつ、有益な情報を集めて人生を豊かにしていきたいものですね。